

# 文研の 知平線

木教授が、「生命観」に注目するようになったのは、大正時代の日本で巻き起こった「生命主義」の思潮への関心からだ。国際的な近代戦争として大きな犠牲を出した日露戦争、都市化や大衆社会の出現に伴い、「生命」や「生命本位」という表現が文学や思想の領域で目立つようになった。

有島武郎や武者小路実篤ら白樺派は、トルストイやロダンの影響を受けて、宇宙の背後にある「永遠の生命」を

たえ、生存闘争ではなく、相互扶助の精神を唱えた。斎藤茂吉は「短歌は直ちに『生命のあらわれ』でなければならぬ」と訴え、「生命の表現」だと主張した。そんな潮流を、鈴木教授は約二十年前から「大正生命主義」と名付け、自然主義や耽美派といった従来のカテゴリーに依拠せず、底流を貫く思想、生命観にライトを当てた。

「西洋から移入した概念に神道や仏教、儒学などが混じり、『宇宙の大自然の二つ』といった突出した観念も広がったが、それだけに多彩で豊かな生命主義が開いた」と昨年、膨大な資料をもとに大著「生命観の探究―重層化する危機の中で」を発刊。進化論の受容から二十世紀前半の欧米での生命主義、近代東アジアの思潮、戦後の受容から現代のテクノロジーの影響までを縦横にとらえ、壮大な「生命観の鳥瞰図」を描き出した。「本来なら門外漢であ

り、『宇宙の大自然の二つ』といった突出した観念も広がったが、それだけに多彩で豊かな生命主義が開いた」と昨年、膨大な資料をもとに大著「生命観の探究―重層化する危機の中で」を発刊。進化論の受容から二十世紀前半の欧米での生命主義、近代東アジアの思潮、戦後の受容から現代のテクノロジーの影響までを縦横にとらえ、壮大な「生命観の鳥瞰図」を描き出した。「本来なら門外漢であ



「生命本位の考え方がいよいよ重要になってきているが、その中身は常に点検していかなければならない」と話す鈴木貞美教授（京都市西京区・国際日本文化研究センター）

## 生命観からみる精神史

鈴木貞美教授

すずき・さだみ 1947年山口市生まれ。東京大卒。89年に日本文学研究科助教授。96年から現職。著書に「日本の文化ナショナリズム」など。下旬に「日本人の生命観 神・恋・倫理」（中公新書）を刊行する。

## テクノロジー万能の今 とらえ方を見直す必要

「今のようなありようで、人類は子や孫の代まで生き延びられるのか。問題がそこまで深刻になっているのに、質問のとらえ方は冷戦時代の枠組みと同じのまま。過去を見つめ直し、二十一世紀にふさわしい学問のあり方を立て直す作業が迫られている」  
現代文学を専門とする鈴木

鈴木教授が集めた生命観に関する膨大な資料の一部



### ■大正生命主義

神でも物質でもなく、生命を第一義におく思想的態度。「生命主義」の語は、京都学派の哲学者田辺元が大正後期に最初に用いたといわれる。村邊谷の「内部生命論」、高山樗牛の本能満足主義をきかへとし、宇宙の根源に生命エネルギーを想定する二十世紀西欧思想の刺激を受け、岡倉天心の美学、西田幾多郎、和辻哲郎の哲学、北原白秋、宮沢賢治の文芸などに広がり、「近代の超克」を目指すアジア的な生命主義へと発展した。

る領域もさまよった結果、ようやく、いろんな流れやつながりが見えてきた」といいます。生命という言葉は、あいまいで多義的でもある。それは昭和十年代に、軍国主義の台頭に伴い、民族の生命という言葉に置きかえられた。戦死することで「民族の永遠の生命に一体化する」という特攻の精神にもつながるものだ。「人間の心を宇宙生命の表象として体系化した西田幾多郎や和辻哲郎の生命主義哲学も、「私たち一人ひとりの生命は宇宙大生命の小さな泡に過ぎない」といった岡本かの

子の言葉も、戦争中は日本民族の生命への滅私奉公にすり替えられた」といいます。敗戦後は、坂口安吾が『墮落論』で「生きよ、墮ちよ」と呼び掛け、個の「いのち」を高らかに主張。七〇年代からは公害問題が表面化し、大庭みな子の『浦島草』『蛆虫と蟹』など物質的な文明社会に反省を迫る生命主義が復活した。さっさと環境問題の深刻化と同時に、エコロジーの思想も広がるが、この十年間余り、特にコンピューターや分子生物学、遺伝子工学の爆発的な発展が、再び生命観を揺さぶり、混乱を起こしているという。「会社を一つの生命体と見て経営を考えたり、すべてを情報という言葉に置きかえる発想が目立つようになった。かつて集団の生命を守るために細胞は新陳代謝するものと、個人を部品のように使い捨てにした発想に通じる」大正テクノロジーが興った一方で、貧富の差が拡大し、近代化の矛盾が噴き出した大正時代。知識人や作家たちは「生命」をめぐって思索し、普遍的な原理を探究した。約一世紀後の今、社会の光景は奇妙に重なる。「二十世紀初め、エネルギーで世界の事象すべてを説明できるという考えが広がった時、生命本位の思想は宇宙の生命エネルギーという考えに類した。すべてコンピューターのプロگرامで語られる今日、生命さえもプログラムの情報で理解する傾向がある。それほど生命観は流行に弱い。だからこそ生命本位を考える時、その中身は常に点検していかなければならない」（文化報道部 道又隆弘）